

小さい頃は小説があまり好きではなかった。アニメや漫画に比べると白い紙に黒い文字が並んでいるだけの小説はいかにも地味で、味気のない文字の並びを渋々ながらに追いかけた記憶がある。しかし、世の中には小説がカラフルに見える人がいる。頭の中で小説世界の情景をありありと思い描ける、といった読み手の豊かな想像力の比喩ではなく、実際に文字に色が付いて見えるのだ。この感覚は「共感覚」と呼ばれ、文字に色が付いて見える他、音を聞くと色を感じる、言葉を見ると臭いを感じるなど、様々なパターンが確認されている。物事に対す

ビッグヒットを生んだ氏の音楽的才能には音階を色で捉える能力が大いに関与しているのかもしれない。更に、共感覚の持ち主の中には「文字を色で捉えることで字面だけでは見分けづらい誤字を容易に見つける」、「数を触感で捉えることで素数か合成数かを瞬時に見分ける」といったことができる人もいるようだ。まさに超能力と言えよう。

常人には到底真似のできない芸当だが、一方で音に対する色、数に対する触感のように、元の概念とさして関連が強くないように思える観点の介在が目を見張る効果

数 | 理 | の | 窓

カラフルな世界



る経験からイメージが連想されるのではなく、通常とは異なる知覚が実際に呼び起こされるのである。

もし文字を見て色を感じることができたら、退屈な読物も「このページは配色が良い」などと思いつつ少しは前向きに読み進める気になるかもしれない。あるいは、もし記号から音が聞こえたら、苦手な数学も「この定理のメロディは美しい」といった楽しみ方で興味を保つことができるかもしれない。物事を通常とは異なる概念で感じることができる世界は、想像してみると中々に面白そうだ¹⁾。また、共感覚は稀有な才能を生み出すこともある。例えば著名なミュージシャンであるビリー・ジョエル氏は共感覚の持ち主であると言われており、「音には色がある」と発言している。それが事実なら、数々の

を生み出し得るという事実は興味深い。現代金融工学の礎である「ブラック・ショールズ方程式」が経済学とは縁遠い自然科学の考えを取り入れることで完成したことを引き合いに出すのは少々大げさだが、いつもと全く異なる観点で物事を眺めてみると、共感覚を持たぬ我々も、時として思わぬ宝物を見つけられるかもしれない。

昨年からの災禍による陰鬱な雰囲気は今なお暗い影を落としている。そんな渦中にあっても、いつもと違う切り口で日常を眺めてみれば、世界は少しだけ鮮やかになるかもしれない。
(須貝 悠也)

1) もちろん共感覚であるが故の不便さもある。例えば数字の1を赤、数字の2を青、数字の7を紫と知覚する共感覚の持ち主にとって、 $1+2$ は直感的には7と覚えてしまう、等。